

キラリテンズ

レオタード・シンテラー1

# 初心者同盟

エリザベス・レヴィ 作  
もきかずこ 訳 若菜 等 絵



●ELIZABETH LEVY  
●KAZUKO MOKI ●HITOSHI WAKANA



レオタード・シンデレラ①  
**初心者同盟**

N.D.C 222p 20cm

一九九〇年九月二十五日 第一刷発行

定価 九〇〇円(本体八七四円)

作者 エリザベス・レヴィ

訳 もきかずこ

画家 若菜 等

装丁 亀甲 健

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

電話 東京〇三―九四五―一一一(大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

©Kazuko Moki 1990 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料  
小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についての  
お問い合わせは、児童図書第一出版部あてに願います。



レオタード・シンテレラー1

# 初心者同盟

エリザベス・レヴィ 作  
もきかずこ 訳 若菜 等 絵

講談社

キララティーンズ

**THE GYMNASTS ① THE BEGINNERS**

by Elizabeth Levy

Copyright © 1988 by Elizabeth Levy

Japanese translation rights arranged

with Scholastic Inc.

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo



# 初心者同盟



7	エバグリーンに不可能はない	121
6	それでも体操をやりたいの	100
5	四人そろって、よごれウサギ	78
4	わたしも小さなマツボックリ	54
3	恐怖の入会テスト	39
2	新入生は、そわそわどきどき	23
1	いざ、体操クラブへ	7



ダリーン

人気者のフットボール選手、  
ビーフ・プロデリックの娘。  
センスがよくて美人の13歳。



ローレン

ありふれた12歳の女の子。  
消火栓みたいな体型!?



シンディ

ローレンの親友で背が高い。  
スポーツ一家で兄が4人。

8 足ガクガクの平均台

141

9 なんてまぬけな映画スター

155

10 しかえしは、したけれど

165

11 握手— これでなかなかおり?

177

12 競技会での大失敗

190

13 仲間がいれば、こわいものなし—

210

あとがき

220



ベッキー

クラブの模範生だけど意地がわるく、女王様気どり。



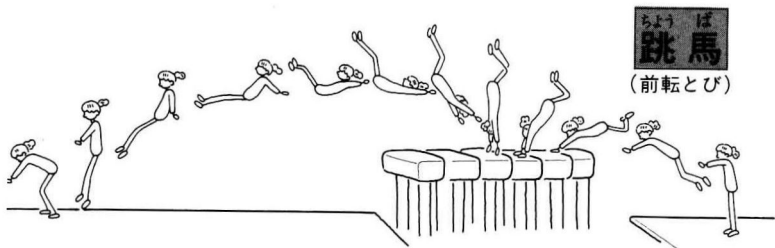
パトリック

エバグリーン体操アカデミーのコーチ。超ハンサム。



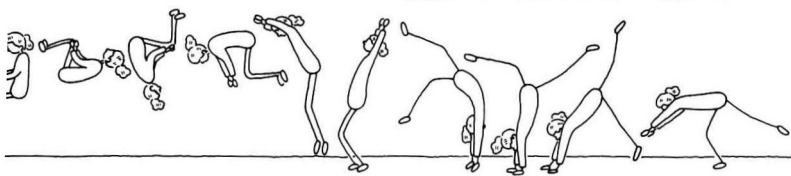
ジョディ

ローレン、シンディと同じ12歳。度胸はあるけど、おちつきがないのが玉にキズ。



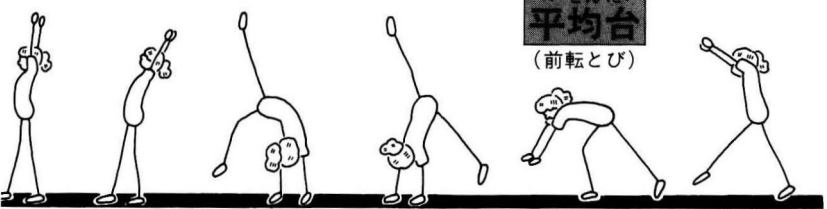
ちようば  
跳馬

(前転とび)



ゆかまじぎ  
床競技

(前転とび→前方かかえこみ宙返り)

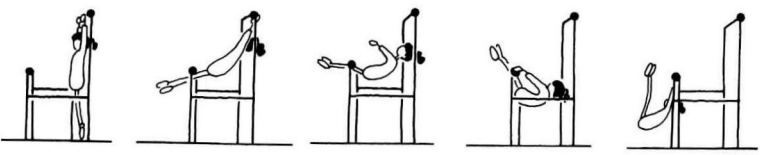
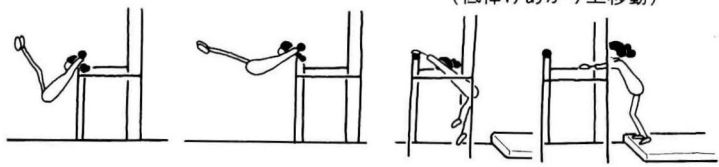


へいさんだい  
平均台

(前転とび)

だん へいこうぼう  
段ちがい平行棒

(低棒けあがり上移動)





## ① いざ、体操クラブへ

「なんでわたしがこんなことに巻きこまれなくちゃならないの。あなたのいうことなんか聞くんじゃなかった」

わたしは親友のシンディに向かって、ぐちつぽくいった。

「おかげで胃がむかむかしてきちゃったじゃない。ストレスがあると、車に酔いやすくなるって知ってる？ 科学的には証明されていないけれど、根拠のある事実だわ。わたしがいい証拠よ」

「ぼくの車のなかで吐かないでくれよ、ローレン」

シンディの兄さんのチームが笑いながらいった。わたしたちは、チームの車で体操クラブに向かっているとところだった。気分がわるくなつたのは、チームの運転のせいだったかもし

れない。まだ免許めんきょを取ったばかりといたって、これほど乱暴らんぼうな運転をするとは思わなかったもの。シンディのほかの兄さんたちもそうだったけど、今のティムはハンドルさえ握にぎれればごきげんなの。喜んでわたしたちを送ってくれるのも、今のうちだけでしようよ。

わたしはおおげさに胃をおさえてみせた。ティムは大あわて。ほんと、ティムって、からかいがある。

シンディはふきだしたけれど、全部が全部冗談じょうだんだったわけじゃないの。体操クラブに行くのはずいぶんひさしぶりで、今度のクラブへは今日がはじめてなんだもの。わたしとしては、このまま家に帰ってベッドにもぐりこみたい心境しんきょうだった。

シンディとわたしは、前にも体操教室たいそうきょうしつにかよったことがある。でもそれはうんと小さかったころのこと。こんなふうにもぐりこみたことをいうと、笑わらう大人おとなっているでしょ。まあまあ、なんてかわいらしいってね。念のためというと、今のわたしは十二歳さいで、体操クラブをやめたのは三年前の九歳さいのときだった。やめたからってちつとも残念じゃなかった。このまま一生、平均台へいきんだいから落ちるようなまねができなくても、十分しあわせに生きていける。わたしはそう思っていた。でも、シンディはそうじゃなかったのよね。

最近、うちの町に新しい体操クラブができたの。エバグリーン体操アカデミーといって、  
広告によれば、「未来に挑戦する」「初心者からエキスパートまで」の教室なんだって。わた  
しは初心者ではないけれど、エキスパートとはとてもいえない。「アカデミー」なんて聞くと、  
わたしはつい、おもちゃの兵隊が足並みをそろえて行進するみたいな軍隊式の学校を連想し  
ちゃう。でもシンディはすっかり夢中になって、いっしょに体操教室に行かなければ、もう  
友だちじゃない、なんていうんだもの。

まじめな話、わたしはおびえていた。だいたいわたしって、新しいことに挑戦するときは  
いつもしりごみをするたちなの。それでも、やることはやるんだから、臆病っていうわけ  
じゃないわよ。だけどこわいものはこわい。ほんのすこしだけにしても。

わたしの気も知らないで、シンディはいう。

「わくわくするなあ。ママがね、新しいコーチのことを調べてくれたんだ。パトリックとい  
う名まえで、まだ若い。二年前コロラド大学を卒業したばかり。だけど、デンバーの町の  
中心にある体操クラブのコーチをしてたくらいの人だからね。それに、ハンサムだよ。でね、  
まるっきりの初心者じゃない女の子を探してるんだって。わたしたちにぴったりじゃない」

「あなたにとっては何。わたしは、前に習ったことなんかみんな忘れちゃったもの」  
そういつてから、わたしは思い出し笑いわらをした。

「みんなでもないわね。平均台へいぎんだいをやっついて、わたしが頭からまっさかさまに落っこちたこと、覚えてる？ それがまぐれで、みごとな倒立たうりつになったのよね」

「うんうん。あんたつたら、これはクマのクマゴロー式のおり方だつていつたつて。あのころ、おもしろかったね」

シンディはこのときとばかりに、さらにいつた。

「あきらめないで、もう一度やってみるべきだよ。あんたは体操たいそうにおあつらえ向きの体型をしてるんだもの」

こういえば聞こえはいけれど、つまりわたしの背せが低いつてこと。体操たいそうには背せが低いほうが有利なんだ。でもわたしは、やせてはいない。いつとくけど、太つてるつていうわけじゃないからね。ただ、おじさんにいわれたことがあるの。おまえは消火栓しょうかせんみたいにかんじようだなつて。これつておせじじゃないわね。わたしは黒くてくせのない髪かみを短いおかつぱにしている。前髪まえがみは切りそろえてなくてハサミですかしてあるのだけれど、美容師びようしの男の

人は、これでちょっとパンクふうな味を出してみたんだっていった。でもちつともパンクっぽくは見えない。せいぜいほめて、十二歳の消火栓みたいな体型のかわいい女の子ってところ。

シンディとわたしつて、まさにデコボココンビだわ。シンディは第二成長期に入っていて、わたしより十五センチは背が高い。成長がとまらないと、このままじゃ巨人になっちゃうってなげいている。おたがいに交換できたらいいのねって、何度もいったものよ。わたしはシンディからあと五、六センチ背をもらいたいし、シンディはシンディで、わたしの試験の点数をもらいたがっている。試験でいい点を取ることなんか、わたしにはいつだっておやすいご用よ。だけど、背はどうにもならないんだもの。

シンディの家族は、みんなスポーツマンなの。シンディにはお兄さんが四人いる。彼女はかわいい末っ子っていうだけじゃなくて、ひとり娘でもあるわけね。シンディが体操選手をめざしているのは、家族で体操をやっているのはほかにだれもないからよ。大家族に囲まれていると、みんなとはちがったことがやりたくなるんだって。

わたしはひとりっ子だから、それについてはなんともいえない。でもたしかなのは、わた

し、シンディもその家族も大好きだったこと。彼女の家は、いつも笑いであふれている。

シンディは、なにをやるにしてもいっしょうけんめいになる。だから、つい、まわりの人間もつられて巻きこまれちゃうのかもしれない。おかげでわたしも、また体操クラブにかよふはめになっちゃった。

三年前、体操をやめたのは、たいしたものにはなれないんじゃないかって、一人ひそかに悩んだからなのよ。両親はやめても気にしなかった。体操はわたし向きじゃないって思っていたんだって。それに、体操のおかげでわたしの勉強時間がなくなるって。輪っかにぶらさがるより、人生にはもっとましなことがあるだろうと両親がいったとき、わたしはさからわなかった。

で、今のわたしは、心のどこかでもう一度体操がやれることになったことを喜んでいる。自分で思うより才能があるかもしれない。もしかしたらすごい素質があるかもしれないってね。

でも、車がアカデミーとやらに近づくにつれ、わたしはますます神経質になった。ティムは、エバグリーン商店街の裏手にある細い道に、車を乗りいれた。わたしはおずおずとたずねた。

「ここはどこ？」

わたしの質問を無視してシンディはいった。

「かまわずどんどん行って」

車は商店街を過ぎ、やがて干あがった小川にそって何本かのハコヤナギの木が生えているだけの道をひた走った。わたしはうめいた。

「思ったとおりだわ。ここはこの世の終わりよ。わたしはこんなところで見すてられて、一生をばかげた棒にぶらさがって過ごすんだわ。ああ、体操クラブにかよう許可をくれた両親をのろうわ。シンディ、あなたをのろうわ」

「わかってないなあ、ローレン」

タイムがさえぎった。

「きみの想像はまだまだ甘いね。もっとひどいことになるかもしれないぞ」

「どういうこと？」

「体操が好きになるかもしれないってことさ。夢中になるかもしれないぞ」

シンディは笑った。

「うんうん。ローレンは夢中になるにきまつてる。でも、そうなくても本音はいわないんじゃないかな」

わたしも笑った。

「約束します。もし、夢中になるようだったら、ちゃんと白状します」

シンディは信用しない。

「さあ、どんなもんだか。体操が好きになって、すばらしい演技を見せてくれるようになって、巻きこんだ張本人のわたしには、なにもいってくれないんじゃないかな」

「シンディったら。みんながみんな、さかだちして世の中を見るわけじゃないのよ」

わたしがいうと、シンディとティムが声をそろえて答えた。

「それは根拠のある事実である」

まったくジョケット家の人たちにはかなわないわね。こんな人たちがそばにいたら、兄弟がいなくてもさびしくなんかない。わたしは笑いながら降参した。

「わかったわよ。また体操をはじめてみたら、おもしろくなるかもしれない。わたしだって、それほどへただったわけじゃないんだから」



シンディはいきおいこんでいった。

「そうよ。それに今度は、わたしたちがチームを組んで、選手権大会に出場するチャンスがあるじゃない。それが今度の体操クラブのいいところよ。いつしよのチームに入つて、あちこちの大会に出るの。アメリカじゆうをまわるかもしれないね」

「それができるのはあなたで、わたしは残るはめになったとしたら？ あ、ごめん。こんなことをいうつもりじゃなかったのよ。そうなったとしても、わたし、控えの席から応援するだけで満足……、でもないか。もしあなたがチームを組むなら、わたしもいれてほしいわ」

わたしがしどろもどろでいうと、シンディはうけあつた。

「だいじようぶ。コーチのパトリックは、みんなをチームに組みこむはずだもん」

「ねえ、ユニフォームってどんなのかしらね。いやだ、わたしだったら。大会なんかに出たくないのに。人と競技するのって、にがてよ」

「うそばっかり」

シンディは笑つてわたしに指をつきつけた。

「あんた、成績がいいでしょ。数学でマツト・デイビスよりいい成績をとったときなんか、